



蛸親爺

第9話 民衆食堂百万年

雅^{がうん}雲すくね

裏町の短い商店街、民衆食堂と墨で大書きにした暖簾の下では、木枠の入口に曇りガラスをはめ込んで、一枚には仮名で『めし』、一枚には真名で『酒』と派手に書いてある。両脇には大小の植木が鉢も見えぬほどに寄せて置かれているのが、夕日影を受け赤く染まる。

狭い店は、両側に化粧合板のカウンターが作られ、座面がドーナツ状に穴の空いた扁平な椅子が五、六ずつ並ぶ。左手のカウンターは厨房をかこみ、なかでは古びた白衣を着た親爺が、お玉を手にしたまま腕を組んで、出入口脇の壁につけたテレビを見上げている。テレビは相撲を映す。親爺はテレビに向かって、「よし」だの、「ああ」だの繰り返している。客は蛸のみ。とろりとして奥にあり。

「たーこ、たーこ、たーこたーこ」

蛸の前には味醂の一升瓶が立つ。飯茶碗に注ぐ。口に含む。

「うめえなあ。本当にうめえなあ。でも味醂だから、おれあ酔ってねえぜ」

「な、そりゃいけるだろ。明るいうちから酒はよくねえからな」

「口当たりが滅法いいね」と蛸は舌鼓を打つ。

「下手な酒よりずっといけるだろ」と鍋を一混ぜすると、縁をお玉で二、三度叩いた。

「おう、部屋に鍵をかけて一人で飲んだら、たいへんな酔い方をしそうだ」と蛸は言いながら体をひねって、水槽へ頭を向けた。底に砂利を敷いて水草が植えてある上に、金魚や目高の類が揺れている。

「昨日よ、店を早めに閉めて荒木町へ飲みに行ったのよ。『越乃寒梅』っであるから、入^へったら、売り切れだとき。へっ、いつから売り切れてたか、

知れたもんじゃねえや。だいたい、越乃寒梅なんて書いてあったって売
り切れてなかったためしがねえ。仕方ねえから、居合わせた客と競り飲み
だ。三合徳利十一本倒してきたわ」

「昨日は、朝から焼酎を嘗めて、縁側でまどろんでたさ。『向こうの庭の
葉っぱも色づいたねえ』なんて思っていたら眠っちゃってなあ。目が覚め
たらよ。横に猫が寝ていてなあ。三匹。三毛猫に、『もしもし、今はいつ
時分かねえ』って聞いたたら、『四時ですよ』ってさ。脇の白猫は、『今は秋
ですよ』って。斑は寝たまんまだ。おれあ、そのまま寝転がりながら月の
出るのを待って茶摘唄を歌ってよ。皆で歌ううちに、また眠っちゃったな
あ」

「仙人みてえな一日だあな、おい」

「気楽に行くしかねえのよ。考えだしたら気が遠くなる。うん、何か食う
か。メンチカツ揚げてくれ」

「一枚でいいかい」と冷蔵庫を開けしなに、「あっ」

「何だ。ねえならほかの物でもいいぜ。揚げ物な。精進揚げ以外な」

「いや、キャベツがねえのよ」

「なけりゃないで構わねえだろ」

「ほかのもんならいいんだけどよ。日替わりをキャベツと豚肉の味噌炒め
にしちまった」とメンチカツを揚げる。

「そんなもん、ミックスフライ定食にでもしとけ」

「豚肉が余ってんだよ。田川の親爺に余計に買わされてよ。キャベツがね
えと。肉の色が変わっちゃう」

「代わりに表の菜っ葉でも入れときゃ、わかりやしねえよ」

「あくを取らねえといけねえからな。まあいいや。ちよっくら店番してて
くんな。向かいで買ってくらあ。お客が来たら、冷蔵庫に伽羅牛蒡きやらごぼうと昆布
巻が入ってるから。自分で出してもらってくれねえか」とメンチカツを皿
に載せ、蛸の前に置きながら店を出た。

蛸は頭の後ろの水槽に眼をやる。水面に金魚が顔を出してまた潜った。

「よう、おめえさんがたも何か食うか。え、何だって」と蛸は水槽のガラ
スに頭をつけた。

「ああ、腹はいっぱいなのか。こんなガラスの桶に入れられて、湖とかのが好くはねえかい。そうだな。太平楽が何よりだな」

表では、八百屋の店先で客が話し込む。

「魚久さん、お惣菜作りだしたわね」

「あんなの、自分で作りゃいいのに。鰻なんて塩をふって焼いただけで百円が三百円だよ」

「あなたのところも野菜炒めでも作って並べりゃいいのに」

「ちよいと、キャベツ一つくんな」

「今日よ、マンゴーが安かったからつい仕入れちまったんだが、持って行かねえか」

「いらねえよ」

戸が引かれ、「すまねえな」と戻ってくる。キャベツを左手で下から支え持つ。右手は油紙の袋を提げている。

「この金魚はいつからいるんだい」と蛸が尋ねた。

「どうだかな。昔っからいるからな。そうして活け飼いにして、たまにパン粉でもやってんだ」とキャベツを刻みながら背なかで話す。

「さっき話したらよ。『ここは年がら年中うまそうな臭いがするし、親爺は親切だし、気をつかう相手もいねえから楽なものだ』って言ってたぜ」

「へえ。金魚がそんなことをねえ。おめえさんは金魚の言うこともわかるのか」

「まあ、だいたいな」

「今、隣の魚屋でよ、鰻もついでに仕入れてきたから食って行くかい」

「そうだな。今日はそれを食って帰るか」と言いつつ、蛸は壁の品書きを眺めた。

『肉豆腐定食三百五十円』『煮込み百三十円』などと、跳ねた字で価がつけられている。

「飯はいいや。鰻だけ焙ってくれ」

「ああ。あと、柿があるな。食ってくか。あ、蛸と柿は食い合わせがあるのか」

「そりゃ、蛸と柿を食った場合の話だろう」

「蛸が柿を食うのはどうなんだあな」

「どうだかな。ま、よしとくわ。しかし大きい鰯だな」

「米国で釣れたものらしいぜ」

「へええ。米国から来たのか」

「今はあれだつてよ。鮪もスペインだつてよ。それこそ、北アフリカや南米やら、地球の裏側からも持って来てるつてな。魚久の親爺が言つてたぜ」

「昔は日本人が勝手に行って、勝手に取つていたのによ」

「一丁上がり」と大根おろしを添えてカウンターに載せた。

「いただきます」と蛸は鰯に言つた。

「うん、うめえな。おっ」

「どうしたい」

「卵がある」

「そりゃ、鰯だつて卵くれえあるだろうよ」

「いや、こう、ありありと見せられちまうと、どうもな。鰯にだつて、卵があるのは当たり前さ。そうはそうなんだが。食いながら、ありがてえとは思つていたんだがな。鰯の卵を食つてよ。染み入るねえ」

お玉を持った親爺は腕を組み、テレビの相撲に見入る。

「猫の取っ組み合いみてえな相撲だあな、おい。遊びがねえわな。ゆとりが」

蛸は黙つて鰯を食う。

「ごっそさん。それじゃ、帰るわ^{けえ}」

「今日は二百円」

「そうかい。またな。たーこたーこ、たーこたーこ」

八百屋の店先に臥していた犬が頸をもたげた。

「おめえさんもまた明日な」と蛸は犬に挨拶して立ち帰つた。

紅の夕日が領している路地を、練塀に沿つて蛸が行く。

旋風に従つて枯葉が舞つた。